

中世偽書の生成

— 『義経虎之巻』 を中心に —

Generation of the middle ages apocryphal book
— Focusing on "Yoshitsune Toranomaki" —

小井土 守敏

Moritoshi Koido

大妻女子大学文学部

Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

キーワード : 偽書, 軍記文学, 義経

Key words : Apocryphal book, War chronicle literature, Yoshitsune

1. 研究目的

中世における「偽書」は、中世的思考あるいは表現の所産であるといわれている。当時すでに古典となったさまざまな書物や言説、あるいは宗教までも対象として、ありそうでない、もっともらしいテキストが生み出されている。中世の「偽書」の世界を解明することは、中世人の思考法に接近することであると言える。

本研究では、そうした「偽書」の世界に迫り、「偽書」が生成されていく背景を究明することを目的とする。特に、平成 26 年に本学に収蔵された稀覯書、『万治三年古板義経公虎巻』を研究対象とし、軍記文学、主として義経伝説から派生した「偽書」の実態を明らかにしてみたい。

「偽書」とは一般に、製作者や製作時期などの由来が偽られている文書・書物を指し、主に歴史学において、当該文献の史料的价值が問題視される場合に用いられる語である。しかし、「偽書」の生成は、歴史資料ばかりでなく、宗教・文学と、そのジャンルを拡大させていく。殊に文学（美術を含めて）のジャンルにおいては、「偽書」と「贋作」の線引きが困難になるが、中世文学を対象として考えると、ニセモノを制作してどうしようというよりも、「仮託」の作品を生成するという意識が強く、すなわちそれは、「贋作」ではなく「偽書」であると考えてよい。

日本の文学における「偽書」の存在、あるいはその許容は、古くから行われており、特に軍記・戦記物については、「偽書」と認定される作品が多い。嘉永 6 年（1853）には、速見行道が偽書の目

録『偽書叢』を著し、伊勢貞丈は「偽撰の書目」で 83 種の偽書を指摘、また、『安斎随筆』の天明 4 年（1784）記事には「偽書」の横行が批判的に記載されているし、小宮山昌秀（楓軒）の『偽書考』や『楓軒偶記』（江戸後期）にも「偽書」に関する指摘が見出せる。

かように、「偽書」をめぐる研究には厚い蓄積が存在するわけだが、佐藤弘夫著『偽書の精神史』（講談社選書メチエ、2002）や、錦仁・小川豊生・伊藤聡編『「偽書」の生成—中世的思考と表現—』（森話社、2003）などに代表されるように、「偽書」の研究は、この十数年の間に、あらためて注目を集めてきている分野であると言える。さらに 2005 年からは、『日本古典偽書叢刊』（現代思潮社）が刊行され、現在第 3 巻まで公刊されている。また近年では、「偽書」の発掘・紹介に止まらず、それらが生み出される背景を文化史論的に扱う傾向が強まっている。

この分野が注目されるのは、「偽書」の世界に中世の理知や宗教観、政道観、死生観などの文学研究の根幹をなす価値観が投影されているからである。そこには現実の世界から跳躍した中世人の理想が、もっともらしい中世における「知」によって繋ぎ止められていると読み取れるからであると考えている。

2. 研究内容及び成果

本学所蔵の『万治三年古板義経公虎巻』（913.47/Ta23-5/1~3）の翻刻を行い、原本が有するすべての図像とともに、本学紀要に公開した。

まず、伝本の所在を調査したところ、当該書、万治3年(1660)刊の同版は、本学の他に、

- ・天理図書館(3冊)
- ・中京大学図書館(3冊)
- ・早稲田大学図書館(2冊・下巻欠)

の3機関に所蔵が確認できた。早稲田大学図書館蔵本については、同図書館のホームページで、所蔵する上・中巻の画像が公開されているが、依然としてその全容に接することが難しい稀覯書であると言える。今回、下巻を含めたすべての画像を公開することができたのは、一定の意義があると考えている。なお、近時山田雄司氏が翻刻紹介されている「義経虎巻」(「【史料紹介】義経虎巻(上・中)」)、「【史料紹介】義経虎巻 下」(「三重大史学」第14号・15号, 2014年3月・2015年3月)は、伊賀流忍者博物館沖森文庫所蔵の写本であり、その祖本となったものが、本稿底本あるいはその同版であると考えられる。版行されたものを書写するという営みについても、本書の流布や位置づけの観点から検討の材料となるであろう。

本書は、渡会浮萍による兵法書であり、その内容は、軍礼作法、秘法秘術としての真言の詞、呪文や、印の結び方などが、挿絵入りで解説されるものである。「義経」と題するが、源義経はほぼ関係がない。あえてその関わりを本書に探るならば、巻頭の「義経虎巻序」に、義経が所持していた兵法書は、伊勢国某所に長らく秘蔵されていたが、「客」の懇望により、「明暦丁酉仲春」(明暦3年(1657)2月)、上梓して世に紹介することにしたのだと記されることによる。そして「虎巻目録」(目録末尾は「義経虎巻目録終」)を挟むと、今度は「兵法秘術一卷之書」という内題らしきものがあり、本書は、秦代の隠士黄石公が、かの長良に授けた兵法書であるとする。そして、神功皇后の代に我が朝に渡って来たものの、後に散逸、醍醐天皇の代に大江維時をしてあらためて招来した折りしも、東征に向かう源義家が本書を

切望したので、和文に翻訳したのだという。時に「承暦二(丙/午)年」(1078・正しくは「戊午」)。そこに「兵法秘術一卷序終」とあることから、本書の母体は、中世に創作された兵書『兵法秘術一卷書』であることが理解される。黄石公が長良に授けた兵書すなわち『六韜』、それが、『義経記』をはじめとする(義経伝説)を介して「義経兵書」に繋がるのである。これら二つの序に続く本篇は、先述の通り軍礼作法、秘法秘術の四十二ヶ条が、まじないの言葉と挿絵で記される。終盤には、「後付」として、六十干支を図式化したものと、摩利支天の垂迹たる黄石公から、妙見菩薩の化現とされる子房公以来の兵法相伝の血脈が載る。

3. まとめと今後の課題

『兵法秘術一卷書』については、『日本古典偽書叢刊』(第3巻, 現代思潮社, 2004年)に翻刻が掲載され、大谷節子氏による詳細な解題が付されている。氏によると、14世紀前半には成立した本作は、他文献にも引用されるまでに広がりを持っていたようである。また、佐伯真一氏は、「軍神(いくさがみ)考」(「国立歴史民俗博物館研究報告」第182集, 2014年1月)の中で本書を取り上げ、中世後期における軍神の変容や儀礼との関わり及びこうした兵法書の類の流布について論じておられる。

実質的には合戦のなくなった近世期に到り、中世に成立した偽作の兵法書を軸に(義経伝説)を纏って『義経虎巻』として版行されたということは非常に興味深く、さらに検証を加えたい。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1]小井土守敏, 「(翻刻)『万治三年古板義経公虎巻』」, 大妻女子大学文系紀要一文系一, 第48号, 2016, p53~75

(2016年3月31日現在)